



京都モノがたり— ⑳

京都に歴史を刻み、洗練を極めてきた京の銘品の数々。伝統工芸にかくれた物語をご紹介します。

お針箱(手前左)の真田紐は予め本体の中に紐を通してあり、ガタガタしないように工夫されている。美しい木目が確保しにくく、大きいサイズのものはいくつもの数が作れない。

桐箱

桐は古くから日本人になじみのある木材。弥生時代の集落・水田跡である登呂遺跡から桐の小琴や田下駄が出土しているほか、正倉院の宝物にも桐の伎楽面や新羅琴が保管されている。桐材が重宝されていたのには、その特性が関係していると言えよう。

桐材は空洞部分が大きく、日本で一番軽いと言われる木材。持ち運びに便利であり、やわらかく加工がしやすいことから琴など弦楽器の共鳴胴として現在も使用されている。さらに、湿度を一定に保つことができるため、大切な物の保管や収納箱としての役割を担ってきた。掛け軸、茶道の抹茶碗などが桐箱に入っているのはこの特性があるからだ。

ここ京都では桐箱の用命は鴨川を挟んで東西で異なったという。東には清水焼の窯元や卸問屋が集まり、焼物を入れる箱を主に作っていた。一方、西側は呉服問屋が多い室町や西陣の織屋があることから、呉服関係の桐箱が求められた。今では川の東西

で仕事内容に違いはないが、場所によって作るのが違っていったというのは興味深い。

アク抜きが左右する桐の善し悪し

桐箱が保管・収納に適しているのは前述のとおりだが、加工しやすいのは材質が均等で狂いが少ないからであり、これには製作工程が関係している。桐の原木はタンニンを多く含みアクが強く、切り出されてから3年ほど雨風に当てる必要がある。天日干しすると木の中に雨水が染み込み、乾く時に中のタンニンを持って外に出てくる。これを繰り返すうちにアクが抜け、狂いの少ない原木になるのだ。

乾燥が終われば製材へ。アクが出て表面が黒ずんだ原木は一枚削るときれいな木肌が生まれる。木目を見ながら用途に合わせた厚さや大きさに切り出すのだが、ここに技量が問われる。例えば、美しく長い木目が通ったものなら短く切ってしまうと呉服



仕上げに塗る砥之粉。京都の山科でほとんどの砥之粉が作られている。



片方で色を塗り、もう片方でぼかしながら絵を描く。絵師によって描き方も使う絵具も異なる。絵はオーダーも可能で好きな草花を頼む人が多い。



乾燥が終わり工房に入れられた原木。手に持ってみて天日干しが足りないと感じれば、工房の屋根上で再び干される。



糊はヘラで叩きながら均一に付けていく。糊付け後は、太い輪ゴムで固定し乾燥させる。

お針箱などの蓋は向きを間違わないよう側面に絵を入れ、絵に合わせて蓋を閉めるように工夫されている。

用の大きな衣裳箱にする。短い木目のものは小箱用に、蓋部分には一番きれいな木目を使うなど、“適材適所”を見極めていく。限られた桐材を有効に美しく取り分けるのは目利きでなければならない。

振り分けられた桐材は、90°に貼りながら枠組みを作る。糊は強度を保ち生地によくなじむようにでんぶん糊と木工用ボンドを混ぜ、夏場なら4～5時間、乾きにくい冬場なら一晩置く。乾燥すれば蓋や底を貼り入れて固定、乾燥を経て最後にカンナで削り、砥之粉を塗る。砥之粉とは、風化した土を加工して粉末にした木工に欠かせないもの。風合いを出すだけでなく、手垢や油止めの役割を持つ。

ピッタリと閉まる密着性と美しい絵柄

西本願寺近くに店を構える箱藤商店は1891年に創業し、現在は5代目の山田隆一さんが舵をとる。呉服関係を中心に桐箱を卸していたが、業界の低迷

を受け2000年にショールームを設け小売りを開始した。看板商品のたまご箱は、丸みを帯びた滑らかなフォルムにかわいらしい絵が描かれている。本物のたまごが割れたようにギザギザの割れ目が入っているが、一見して気づかないほど密着している。「この丸みの加減やなじませた割れ目は職人の手の感覚です」と山田さん。お針箱も同様に、ピッタリと蓋が合う。「先に入口の無い箱を一枚の板から作り、あとから上下に割ってカンナで削り、ペーパーで磨いています」。境目がわからないほどに蓋と本体が密着し、前後逆にすると閉まらないわけはここにあった。また、密着精度にこだわるだけでなく、日本画の絵師を抱え、絵付けにも力を入れる。「絵はお客様の要望に応えられる。自分だけの桐箱を楽しんでほしい」。優れた保管用桐箱に留まらない、魅せる桐箱は顧客層をどんどん広げている。

(取材協力：箱藤商店) <http://www.hakotou.co.jp/>